

とを知って精進したい。

雨あがりの真夏のようなハウスの中の仕事も今年は何となくやりがいのあるような気がする。主人の病氣療養に力を注ぐことも、歪みがちな農村の、私達の活動にも自信と力を与えてくれた。うし年の私に記念すべき、ありがたい収獲であった。

(嘉島町生活改善グループ員)

富岡古城跡に思う

大仁田 喜義

肥後国天草郡富岡城は、肥前国唐津城主寺沢広高が関ヶ原の戦いの功によって天草郡四万二千石を増されたので、その統治のため慶長八年(一六〇三)築城したものである。

領地を治めるためには、その交通の中心地に築城するのが普通であるが、ことさらそのはずれに築城したのは、天草が離島のため、海路で最も近い富岡に築城して、本領との連絡を最優先に考えたのであろうといわれていた。然しながら築城の位置については、古くは元久二年(一一〇五)藤原弘光が天草北海岸の六

ヶ浦(浦とは漁業集落のこと)の地頭に任せられてから、志岐六ヶ浦のいずれにある志岐に築城している。これはこの頃外国船がしばしば日本の沿岸を窺っていたので、この警備のため、外海に近い志岐に築いたようであり、寺沢氏が富岡に位置を求めたのも、同様の目的で、本土防衛の最先端として重要視したのであろう。元和元年(一六一五)一國一城の制が施行され、全国にわたって本城以外の城を破却したときも、富岡城は長崎警備の名目によって、特に存置を許している。

ところが富岡城はキリシタンとの関係が深く、その関係において設置されたのではないかとも考えられる。

天草は永祿九年(一五六六)ザビエルの後を継いだ二代日本司教長トレスの命を受けたアルメーダが、志岐に上陸して布教をはじめたから、キリスト教が燎原の火のように広がり、元亀元年(一五七〇)には全国の宣教師が志岐に集まり、宗教会議を開くなど、一時は日本キリスト教の中心地になったこともあり、その勢は侮(あなどり)り難いものがあった。

キリスト教を異端視した徳川幕府は「排耶」の焦点を天草、島原にあて、富岡城・島原城を拠点として苛敵誅求(かれ

んちやうきゅう)を行ない、キリシタン弾圧を強行した。追いつめられた農民達は寛永十四年(一六三七)十一月ついに立って、富岡城代三宅藤兵衛を屠り、一万に近い大軍をもって富岡城を攻め、死闘三回ノ落城寸前にまで追いつめながら急に囲みを解いて原城にたて籠った。有名な島原の乱である。翌年、原城は陥落し、キリシタンは一掃された。

この乱をもって徳川幕府の全国統一の基礎は固まり、鎖国を行ない、宗門改めの名の下に綿密な戸口調査をして封建制度を確立したのである。

これを以って富岡城の役割は殆んど終了したと思われる。乱後山崎家治を襲封して、更に城を強化拡充したが、これは戦力の為のものでなく幕府の權威を顯示するに止まった。キリシタンの存在が全く認められなくなった寛文十年(一六七〇)時の城主戸田忠昌によって富岡城は破壊されたのである。その寿命は僅か七十年に満たず、日本キリシタンの壊滅と運命を共にしている。

今、富岡城址を訪れる人は多い、藍より青い海を背景に、老樹が鬱蒼(うっそう)と繁茂する静かなたたずまいの中には、われらの先人達が迫害を受けたり、血なまぐさい争鬭を繰返した跡は全く感じられないが、城址内資料館で僅かに、富岡城がそれぞれの時代に果たした役割を知ることができる。

ここに杖を引く人達が、これらの歴史を回顧して、新しい日本の発展に資せられることを希望する。

(元苔北町役場総務課長)

春

後藤 俊作

肩をいからせ、威張り返っていた冬將軍が故郷へ帰り仕度之急ぐ頃、やっとな春の気配が感じられるようなる。日が暮れても冬の日暮れとは違って、暖い心良い風が庭先を走り抜けて行く。冬が去り、春に移るこの季節。四季の中でも一番好きな時である。

しかし、かつて私もそうであったが、この春先の華かざとは逆に、気の重い春の到来と思う人も少なくはあるまい。春は入学試験の幕開きでもある。この時期の世間の雰囲気は、一種独特のもが感じられる。学生本人はもとより、その家族までもが気をとがらせ、この試験に翻弄される。日本独特の春の風物詩と言えよう。

「入学試験」とはわれわれにとつて、それでは「何なのか」と、問われた時、「何なのだろうか?」と誰もが、はつきり

と定義出来まい。ただ希望する学校に籍を置くためのものなら、今日のようにそれ程まで苦しむこともなからう。しかし、そこには苦しまねばならない今の社会の構造がちゃんとあるように思える。

日本の社会には、「伝統」を尊ぶ習慣が強く、学校社会にもこの考えが深く浸透して、「名門校」なるものが多く見られる。この名門校の存在を強くバックアップするのが、現代社会に巣喰う「学歴重視」の考えであろう。確かに古い歴史を持つ名門校と呼ばれる学校は多くの優秀な人材を社会に送り出して来たし、現在も送り出している。だからと言って、出身学校、学歴によってその人をそれだけで評価出来るとは思えない。

今日、日本では教育の普及、経済の発展、情報の氾濫などで、簡単に大学まで修学することが出来るようになり、豊富な教養を身につけることが可能となってきた。しかし逆に考えると、より良い社会的地位の確保のためには、大学までという風潮に乗って、高等な教養を得ようとしているようでもある。それでは、この教養は何のためのものであるのか、疑問でしかない。

自分のためにあえてこの苦しみを飲むからと言って、受ける側に責任があるとも言切れない。学校教育そのものに欠陥があるように思える。小・中・高との教育をみても上級学校へうまく入学するための受験教育であり、また実際その教

育しかやられていない。人間性を育てる教育などまったく影がうすれてしまっている。このことは、中学生などが成績の良し悪しに心を痛め、自殺するという現実に出会うことからも明確であろう。

でも家庭教育にも欠陥は多い。「教育ママ」という言葉が聞かれるが子のために親はどのような教育をし、何をしようとするのか、焦点のずれがあるようである。子供の能力、性格は親が一番知っているはずである。

学生諸君も政治に目を向けるのは大いに大切なことと思うが、今、自分達のまわりの教育制度がどんなものかを見つめ、試験に明け暮れる学校生活の改善にエネルギーを注いだらどうだろう。

(熊日事業部)

子どもに夢を

木下 昌子

昨年、教育評論家の金沢嘉市先生の講演を聞く機会にめぐまれて、たくさんのお母さまと一緒に子どもを育てる

ことはどういふことを改めて考えあいました。深く感激し、今私は何をしなければならぬかを教えられたように思います。

子どもを育てることは、やり直しがきかないことですし、何が必要なのかを見きわめる母親になるのは大変なことです。

はじめての子供は何もわからないままに手さぐりで、二番目はあれよあれよというまに、三番目はベテランのようですが、今度はつい甘やかし、どの子も満身に育てられません。

毎日いろいろな問題にぶつかり、一家庭内で悩み考えてもよい考えが浮びません。

教育、文化、生活面での環境は恐ろしく悪化するなかで、子ども達が少しでもよりよく、より豊かにすこやかに成長して欲しいと思うのは、すべての大人の願いだと思えます。このやむにやまれない気持が全国のお母さんの心を動かし、「子ども劇場」設立の運動が起こってきたのだと思えます。そして熊本でも熊本子ども劇場が発足しました。

「子ども劇場」では芸術の高い子どもたちのための良い作品を選び親子ともども鑑賞し、美しいものを美しいと感じ、良いものに感動する心を養う例会をいたします。

又自分達でも児童文化について考え合ひ、創造発展させてゆきます。キャンプ、

子どもまつりは絶好の自主性を養うチャンスです。

舞台劇、人形劇を観て笑い、涙を流して感動し、喜びの拍手を送り、またある時はバスを連らねて阿蘇高原に遊び、青空のもと大自然にふれてたくさんのお友達と自由に交歓したことなど、親子いっしょにこの喜びを味わいつつ、成長してきました。

本来子どもはすばらしいエネルギーをもっていてもわかりました。それを引出すのが私達の役目であると思っております。

一方では家庭に閉じこもりがちな母親が、もう一歩家庭の外に出て自分が生きていることの意味、子どもを育てることの意味、さらに文化や社会に目を向けるようになって来ました。

熊本の子どものために、日本の未来を創る子供のために、私達はもっと真剣に子どものことを考えねばならないと思えます。

世界中にはまだまだ悲しい運命にさらされている子どもがたくさんあります。何かをしなければいけない気持ちかられます。

今、私に出来ることは「子ども劇場」をもっと多くの方々とこいっしょに手をつないで、この輪を拡げてゆくこと、このことに生き甲斐を感じて励んでおります。

(主婦・子ども劇場運営委員長)